

英国地震史考

現在の歴史学研究における最大のテーマのひとつが「国民」の成立史であることは周知のとおりだが、私は、それについて、「国土」の「発見」ないし「創造」が、近代的な国民意識の誕生に先行し、その「器」ないし「母体」になったとみる。あるいは、そこまで言わずとも、少なくとも国土と国民のそれぞれの「誕生」は深く関連していたとみたい。

そのことを、一六世紀から一八世紀のイギリスにおいて、たいへんな知的ファッションとなった「古事物研究家」のテキストの分析を通して明らかにする、すなわち、今日では彼の国でもあまり省みられないことのない彼らのテキストを介して、近世から近代にかけてのイギリスにおける国土誕生の産声を聞いてみよう、というのが私の研究テーマである。こなすべき作業が山のようにある。ここでは、そのごく一端を述べることにしたい。

ここでいう「国土」とは、国民の共有する（とされる）過去の記憶が刻み込まれた大地の謂いである。近代化は、人と「大地」（ランド）との関係をおおきく変えた。大地はかつての聖なる属性（そ

見市雅俊

れと対になる魑魅魍魎の存在も含めて）を失い、純然たる「場所」（プレイス）と化した。ところが、その世俗化された地平線において、大地は新たな聖性を獲得した。それが「国土」（カントリー）である。大航海時代以降、西洋は「世界」を発見するが、同時に目前に広がる大地に国土を発見したのであった。

国土史研究の枠組みとしては、次のようなことが考えられる。まず、文化史。近世と呼ばれる時代、後にも先にもないほど、「驚異」(wonders) に対する「好奇心」(curiosity) が高まる。中世でも、不可思議な現象に対する関心はあったけれど、そこでは神の摂理という絶対的な枠組があった。いっぽう、一八世紀以降の近代となれば、驚異は科学的探求心の発端ではあっても、驚異それ自体を尊重するようになるとは、少なくとも有識者としてはあってはならないことになる。驚異を驚異として感嘆することは、無学であることの証しでしかなくなるのである。

ところが、近世においては、神の摂理では説明できない、しかし普通の自然現象とは違う、そのような自然の驚異それ自体に対する

並々ならぬ関心が、階層の違いを超えて社会全体に充滿していた⁽¹⁾。古事物研究家の探求心も、そのような近世に固有の好奇心のひとつのありようであって、この時代に描かれる国土もまた驚異に満ちたものとなる。

つぎに、経済史。この時代、封建的な土地所有の在りようがおおきく変わり、「大地」は市場経済の中に投げ込まれ、「場所」となり「商品」化される。そのことを、ここでのテーマに引きつけて言えば、古事物研究家たちは、近世イギリスにおける経済開発の二つの焦点である低湿地帯と森林の開発について、事業推進派のプロモーター役を演じた。さらに、その延長線上でアイルランドも低湿地帯と森林の未開地と定義され、イングランドによるその「国内植民地」化が正当化されることになった。そのうえで、それらの未開地に対して、とくにイングランド的な田園、すなわち、エンクロージャーされ、なおかつジェントリーの名家が「カントリー・ハウス」から睥睨する田園が、古事物研究家にとってのあるべき国土の景観となる。

最後に、地政史。近世におけるこの島国の歴史は、国家・国土のありようをめぐる、対外的には、カソリックが失地回復しつつあったヨーロッパ大陸との関係（それにもなう、急進的なプロテスタントの危機感を抜きにしたイギリス近世史は気の抜けたビルルのようなもので、まことに平板になってしまふ）、そして対内的には、三つの王国、ないし四つの民（イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ）の相互関係を軸に展開した。ごく大ざっぱにまとめてしまえば、以下のようなになる。

国際派・王権派—大陸とのつながり—対カソリック宥和—絶対王政下の四民平等のブリテン国家

孤立派・議党派—島国（と海洋帝国）—反カソリック—イングランド（アングロ・サクソン）—優位のブリテン（スコットランドは大英帝国の「現場」での「対等」の担い手に、アイルランドは「国内植民地」に、ウェールズはロマンチックな「秘境」となる）

古事物研究家の社会階層的な基盤がジェントリーであることは言うまでもないが、その政治的な立場は多様であって、ひとくくりにはできない。無理して特定化するよりも、むしろ、彼らのテキストは両陣営のそれぞれの国土観の形成に貢献したといった方が正確であろう。

古事物研究はルネッサンス期のイタリアではじまり、近世的な国家形成に連動しつつ、ヨーロッパ各国で盛んになった。イギリスでは、ヘンリー八世の時代にその流行が輸入された。一五八六年、ウィリアム・カムデン（一五五二—一六二三）のラテン語版『ブリタニア』が出版された。この本は古事物研究をイギリスにしっかりと定着させたばかりではなく、内容的にも、その後、それを凌駕するものはいかに登場しなかった。文字どおり、イギリス古事物研究の最高峰をなす著作である。

一五八六年の出版。つまり、スペイン無敵艦隊撃破のわずか二年前である。そして、一五八九年には、こちらは日本でもよく知られ

ているリチャード・ハクルートの『イギリス国民の主要航海記』が出版された。イギリスが大国への道をいっきに駆け上がる号砲となつたこの戦勝をはさむようにして出版された二つのテキスト。両者は、この島国の内と外という違いこそあれ、近代イギリスの門出を寿ぎ、同時にその住民が「国民」としての意識を形成していくうえで決定的な影響力をもつことになつた。

『ブリタニア』がラテン語で書かれたことは、読者としてまずヨーロッパ大陸の知識人が意識されていたということにはかならない。実際、この本は大陸でたいへん評判をとつた。くわえて国内でも好評で、版を重ね、一六一〇年には最初の英訳が刊行された。通説では、その訳者であるフィルメオン・ホランドが『ブリタニア』のラテン語の原文にはなかつたことを勝手につけ加えたとされているが、私は、そのホランドの書き足した部分とされるものの中身からみて、カムデン自身がつけ加えたものと判断する。さらに一六九五年には、エドモンド・ギブソンの編集になる新しい英訳版が出版された。ここではカムデンのテキストについて検証がなされ、さらに新たなデータが追加されていた。

さて、古事物研究とは、地方名家の家系、口頭伝承、過去の事件、考古学な遺物はもとより、化石、奇石、洞窟など、対象とする地域の来歴に多少とも関係がありそうなものなら何でもかんでも調べ上げる、あるいは、それにまつわるデータなり、モノ（たとえば古銭、化石、古文書など）を収集しようとするものである。ごく大ざっぱに言えば、歴史と地誌とを結合させて、対象となる地域を時空両面から描こうとするものである。『ブリタニア』の場合は、その対象

がこの島国全域となる。後代の、ある特定地域に限定したものに比べて、当然、きめが粗くなるし、実地調査をおこなわなかつた地域については間接情報に依存せざるをえなかつた。

ある歴史家によれば、『ブリタニア』の最大の功績は「有機体的な歴史の連続性」を提示したことである。私なりに言い換えるなら、それまでの政治ないし教会中心の伝統的な歴史学に対して、カムデンは、「社会史」の観点を導入することによって脱政治史をはかり、国土に立脚した国民の歴史、すなわち「国民史」を作りあげたのであつた。また、それとの関連で重要なのは、史料として、考古学遺物、あるいは口頭伝承なども利用しようとしたことである。一言でいえば、カムデンは、新しい歴史学を提起したのであつた。

『ブリタニア』の当初の目的は、古代ローマ帝国時代のブリテンを古事物研究の手法によって再現することであつた。それにかんしてカムデンは、『ブリタニア』のなかで次のようにいう。

かつて、ブリテン人とローマ人は長い年月にわたる相互の接ぎ木によつて、ひとつの国民へと生育した。

（この島国では、たしかにブリテン人、スコットランド人、ピクト人、そして「われらが祖先のサクソン人」があい争つたが、しかし、今では、長い年月にわたる接ぎ木と混合によつて、われわれすべてがひとつの国民となり、宗教と学芸によつて文明化されたのである。⁽²⁾

このように、カムデンは四民平等の「ブリテン」の理念を唱い上

げたのであった。あえて政治史の文脈で読み解けば、その立場は、超越的な立場からこの島国の全領域に画一的な支配権を行使しようとする王権の側に近い。しかしながら、『ブリタニア』の政治的なメッセージは重層的であって、議会派寄りの「アングロ・サクソン」中心史観の萌芽を見てもとることもけつして不可能ではない。むしろ、様々な立場の人びとが各人各様にメッセージを読みとる事が可能なテキストなのである。「国民史」と呼ぶ所以である。

では、『ブリタニア』とは、どのような内容なのだろうか。ひとつサンプルを紹介しておこう。イングランド中西部のスタッフォードシャーの章からのものである。

Dove川は半日でいっきに激流となり、羊や牛を押し流してしまい、周辺住民は真っ青になる。しかし、同じ時間で水位が下がり、もとの流れに戻る。いっぽう、Trent川の方はいったん堤防を越えてしまうと、四ないし五日間、周囲が水びだしになる。ここで、Trentに合流する川に戻ることにしよう。まず、Hans川。この川は地中に潜行し、三マイル離れたところで再び地表に現れる(一)。次にTrent川に合流するのはChurnet川であって、Delta-Cross修道院のそばを流れる。この修道院は、第三代のチェスター伯爵ラナルフによって建立された。

Leikeは定期市で有名である。……Cheley(現在の綴りでは、Checkley)の教会墓地に、三本の石が檜のようにして建てられている。そのうちの二本には細かな文様が刻まれている。中央の石がいちばん高い。住民はこの地で、一方は武器を持った、

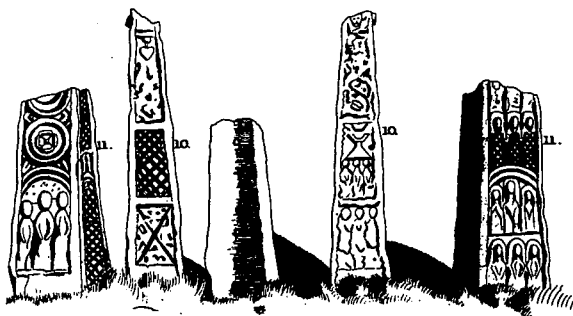
もう一方は武器を持たない軍勢の間で戦いがあったという。そして、三人の僧止がその戦闘で殺害され、その三人を偲んでこれらの石が建てられたとする。この物語にどのような歴史的真実が秘められているか、私はまだわからずにいる(二)。

さて、Dove川は堅固な石橋をくぐってUicester(現在の綴りでは、Uttoxeter)にたどり着く。サクソン語ではUttoxeter(原文はサクソン文字)と綴られる。簡単に登れる丘陵のうえに位置する。建物にかんしていうと、すっきりしていて、見栄えもよいが、それよりも牧草地と牛が素晴らしいことが豊かであるとの印象をあたえる。この地を訪れる以前は、ここがEocœnumだと考えていた。名前が似通っているからだ。しかし、現在では、もっと確実な答えをもつにいたった(三)。

『ブリタニア』はこの島国全域について、このような文章が連続と続くと思えばよい。個人的な体験でいうと、イギリスに留学していたさいに、彼の国の学者に『ブリタニア』のことを尋ねると、誰でも知っていた。しかし、実際に読んだかどうかとくくと、歴史家も含めてほとんど誰も読んでいなかった。おそらく、同時代にあっても、自分の住む地域についての記述は熱心に読んでも、他の地域については、例えばこれから旅行しようとする場合に目を通しておくというような読まれ方をしたに相違ない。

傍線部分について簡単に分析してみることしよう。

(一)。これは、地球のなかには壮大な水の流れがあるとす、遠くアリストテレスにまで遡る地下水脈学説が前提としてある。実際、



図①

こともあれば、ティルベリのゲルウァシウスの『皇帝の閑暇』(池上俊一氏による翻訳がある)のような中世の著作から引いてくることもある。いずれにせよ、これらの驚異は、『ブリタニア』という当時のベスト・セラーに収録されることによって、それまで大なり小なり「ローカル」だったもの、ないし一部の有識者にしか知られていなかったものが、「ナショナル」なものへと昇華し、近代以降にあっても、たとえ「学者」からは「俗信」として切り捨てられようと、また一般の人びともそのまま鵜呑みにするようなことはなく

カムデンは、このような地下潜行川、さらに泉や洞窟に並々ならぬ関心を示し、おそらくその延長線上で、地底国伝説(地底には人の住む国があり、その住民が地上世界に迷い出る、逆に地上人が地底国に迷いこむという伝説)にも相当の関心を寄せている。

これは、先に述べた「驚異」に対する「好奇心」とみてもよい。『ブリタニア』には、この他、いくつもの驚異ものが登場する。地元住民の口頭伝承を引き写す

なっただにしても、何かしらの神秘性を内に秘める大地像の生成におおきく寄与したことは間違いない。そのような神秘性こそ、国土という近代的大地の新たな聖なる属性を保证するものであった。

つぎに、(二)。図①は、ロバート・プロット(一六四〇—一九六)の『スタッフォードシャー自然誌』(一六八六年)からのもの。同じ石柱である。カムデンは実際にこの三本の石柱を観察し、それから住民の言い分を収録した。今風にいえば、考古学遺跡を实地に調査し、それにまつわるフォークロアに耳を傾けたことになる。同じような伝承から推測すれば、これは、侵入した異教徒のデーン人とキリスト教聖職者の殉教の伝説であろう。これも『ブリタニア』を介して、晴れて全国ネットワークの遺跡、そして伝説となる。

最後に、(三)。すでに指摘したように、『ブリタニア』の最初の構想は、古事物研究の手法を用いてローマ帝国期のブリテンを復元することであった。その具体的な作業は、「アントニヌス巡行表」(ディオクレティアヌス帝時代に完成されたとされるローマ帝国の交通ルート一覽)に記載された古代ブリテンのローマ人支配者側の「ステーション」が現在のイギリスのどこであるかを特定することだった。ラテン語で記載された各ステーションの地名、およびステーションとステーションとの間の距離をもとに、以前から、その特定作業がなされていた。カムデンはその成果をふまえつつ、この傍線部分にあるようにローマ街道を基軸にしてフィールドワークをおこない、各地で特定していった。イギリス版「魏志倭人伝」だと思えばよい。ある同時代人は、そこに新しい研究姿勢を次のように読みとっている。

カムデンはたいへん苦心して旧い場所を探し求めた。その姿は賞賛に値する。彼は、去ってしまった多くの古都を必至に捜し求めた。なにかしらの徴や証拠を手がかりにしてその発見につとめた。たとえば、ローマ街道上の位置。他の古都からの距離。名前の類似性。住民の伝承。発掘されたローマ貨幣。何かしらの廃墟などがそれである。⁽⁴⁾

そうして、カムデンは、スタッフォードシャーの別の場所であつたに Elocetum を発見する。

ローマ軍道は……Falkeley 橋において（スタッフォードシャー）に入り、ほぼ一直線に西に進んで、お隣のシュロップシャーにいたる。Elocetum を発見することを願って、私は軍道を詳しく調査した。アントニヌス道路表によれば、Manvedun の次の中継点は Elocetum となっているからである。幸いにも、私はとうとうそれを発見した。…アントニヌス道路表が Manvedun から Elocetum にいたる距離とするまさにその地点において、私はローマ軍道の近くで旧都の遺跡に遭遇したのである。主教管区として知られる Lichfield から南にはんの一マイルの地点である。現在も残る壁にちなんで英語で Wall と呼ばれる。その壁はおよそ二エーカーの土地を取り囲んでおり、…… Castle-croft と呼ばれている。ローマ軍道をはさんで向かい側にも、土地の住民の伝承によれば、もうひと

つ小さな旧都があつたが、ウィリアム征服王の時代より以前に破壊されたという。住民は、土台の大ききからして寺院が建てていたと推測する場所を示し、さらに、ローマ皇帝の貨幣をたくさん見せてくれた。貨幣は、いつの場合にも古代の絶対確實な証拠である。⁽⁵⁾

カムデンは行く先々でこのような作業をおこなうことによって、それまでの研究をこえる成果をあげることができた。その研究のスタンスといい、手法といい、まとめ方といい、ここに近代歴史学誕生の一端をみても、けっして行き過ぎにはなるまい。⁽⁶⁾

すでに述べたように、一六一一七世紀は、「驚異」に素直に驚嘆する時代であった。その延長線上にあるとみてよいと思うが、同時代の大事件に、「グレイト」という形容詞がよく付けられた。まず、一六六五年の「大ペスト」(The Great Plague)、そして翌年のロンドン「大火」(The Great Fire)。この二つについては、すでに拙著『ロンドン—炎が生んだ世界都市』(講談社メチエ選書)のなかで詳しく論じた。

そして、もうひとつが「大地震」(The Great Earthquake)。一五八〇年と一六九二年にそれぞれ起きた地震のことである。「ロンドン……」のなかでも、一六九二年の地震について簡単に触れておいた。たしかにあの島国でも地震が起きるのだ。明治以来、イギリスを論じた日本人はあまたいても、その地震をまともに取り上げたのはおそらく私が初めてである。

デイヴィンソンのおそらく唯一のイギリス地震史研究によると、西暦九七四年から一九二一年の間に、およそ一千回以上の有感の地震が起きた。ちなみに、今日の観測によると、体に感じない震動は、一年に二百から三百あるという。その有感地震のうち、「震度八ないし九」(今日のそれとは違って、デイヴィンソンの独自のもの)の地震は二回あった。もっとも被害が大きかったと推測されるのは、一八八一年四月にコルチェスターで起きた地震によるものである。震度は、デイヴィンソンによれば九、今日のそれでは四・五であり、四百以上の家屋がなんらかの被害をうけ、二人が死亡している。近いところでは、二〇〇三年九月三日にイングランド中部で震度四・八の地震があり、人的被害はなかったものの、一部で煉瓦が崩れたりして一大パニックになったと報じられた。

一五八〇年四月の地震は、デイヴィンソンの震度でいえば八規模のもので、歴代のトップクラスに入る。当時の記録によれば、「ロンドンでは、六本の煙突のてっぺんが落下し、多くの石造りの建造物が揺れた。」そしてロンドンのある教会では、礼拝中の若者が落下してきた石で頭を強打されて死亡、他にも数名が重傷を負った。

いっぽう、一六九二年九月の「大地震」の方は、イーヴリンの日記などでみるかぎり、たいした揺れではなかったようだが、同じ年の六月にジャマイカで大地震および津波があり、ポート・ロイヤルだけでも三千人以上が死亡したことがイギリス国内でも大々的に報じられていたこと、さらにこの地震はイギリスだけでなく、全ヨーロッパ大陸規模のものであることが後でわかり、そこで「大地震」と呼ばれるようになったと思われる。

ここまでは、言うならば実証的なイギリス地震史である。イギリスでも時折、地震があります、という「トリビア」的な話にすぎない。それよりも注目したいのは、地震という現象が近世においてたいへん重要な概念となったことである。

たしかに、それまでも地震はとくにキリスト教の終末論の系譜で登場していた。たとえば、一三世紀のイギリス年代記としてよく知られる、マシュー・パリスの『大年代記』には一二四七年のロンドンの地震についての記述があり、こう書かれている。「西方の国々では、地震がめつたに起きず、自然の法則に反する」ため、「終末が間近である」とみられている。ところが、一六世紀から一七世紀にかけて地震に対する関心がそれまで以上に高まるのである。神学次元でいえばこの時代を支配する濃厚な終末ムード、そして地学次元でいえば自然衰退論がその背景にあった。両者は、密接不可分の関係にある。ごく大ざっぱにまとめると、次のようになる。

キリスト教の伝統的な世界観は、終末という、言うならば「時限爆弾」を抱えこんでいた。全能の神は、その爆発の時間を予めセッティングしておいたはずであった。問題は、終末があるかどうかではなく、それが何時かということだった。いつの時代にも終末が間近だとする声は聞かれたけれど、一六・一七世紀は終末「ムード」といってもけっして過言ではないほど、その到来に対する関心が高まった。当時の最良の頭脳が、中世とは比べものにならないほど緻密な、「科学」的な聖書の分析によって終末の時期を予測しようとした。たとえば、フランシス・ポターは各種の科学機器を考案し、また先駆的に輸血論を展開した、その明晰な頭脳を、終末論でもっとも注

目された「黙示録」の一三一―一八の「獣の数字」、「六六六」の解析においても、たぶん同じように熱心に駆使した。その研究成果である『数字六六六についての「解釈」(一六四一年)』は、當時たいへんな評判をとり、近代人の草分けと目すべきサミュエル・ピープスもまじめに読んでいた。また、一七世紀中葉から末までロンドンにおいて説教師として活動したトマス・ドゥリトルは、一六六七年の『罪の懲らしめ』のなかで、大ベストと大火を神の「お怒りの炎」だと述べ、一六九三年の『地震論』のなかでは、「ベスト、火事、地震は、神の裁きのなかでももっとも恐ろしいものだ」とした。ドゥリトルによれば、イギリスでは立地条件からして内陸部では地震は「自然」には起きない。ところが、一六九二年のそれはロンドンをはじめ内陸部が揺れた。したがって、自然現象ではなく、神の摂理が表明されたものと心得るべきなのであった。⁽¹²⁾

一方、地学的な観察では、伝統的な自然衰退論の一環としてあった「浸食」(Genutation)にたいする関心が、この時代、ルネサンスに端を発する自然観察熱によっていっそう高まり、そのうえで、プロテスタンティズム陣営のなかでも殊更に人間の罪を強調するカルヴァン主義と結合し、自然界も、そして人間も軌を一にしてひたすら衰退・墮落しつつあるという見方が有力になった。地震に対する関心の高まりも、その文脈で理解しなければならぬ。

ところで、この時代、地球の成り立ちについては三つの考え方があった。ひとつは、今みる地球の形状は神が造ったときと同じであるとするもの。第二番目は、ノアの洪水による激変を認めるもの。

第三番目は地震活動による変化を認めるもの。時間的にみれば、一

七世紀初頭の段階ではまだ第一の見方が有力であったが、しだいに第二もしくは第三のカタストロフィー説が優勢になっていった。終末ムードが過去へ投影されるとき、激変の予感ほ激変の歴史を生んだのである。

侵食を中心とする地勢の変化の観察や化石の蒐集(これも驚異コレクション熱の一環である)と研究は、ダイナミックに変化する地球というイメージを醸成しつつあった。そのような研究がいずれは創世記の記述全体を穿つことになるわけだが、短期的には、この第二もしくは第三のカタストロフィー説が、聖なる地球史と侵食現象や化石にかんする近代的な科学観察の結果との矛盾をうまく解決してくれた。言いかえると、科学的観察が進めばすすむほど、カタストロフィー説が有力になっていったのである。⁽¹³⁾

さらに、「驚異」としての自然現象がからむ。すでに述べたように、それまでの神の摂理に完全に包摂される自然という見方とも、逆に、「均質」化され、実験によってすべてが検証可能な自然という見方とも違う、当時の言い方でいえば、自然の「戯れ」(Drama)もしくはspot。それに対する「好奇心」が以上の議論と微妙に重なる。

『ブリタニア』には、これまでほとんど注目されなかった、あるいは言及されてもごくおざなりの扱いしかうけてこなかった、しかし、私見によればたいへん注目すべき地震論がいくつか登場する。以下、逐一、みることにしよう。

『ブリタニア』の本文は、次のような文章で始まる。

世界に名だたる島国、イギリスは大洋によってヨーロッパ大陸から分かれている。……イギリスはこのように近隣の国々から程よい距離で離れており、しかも、その良港のおかげで世界中との交易に適している。いわば、人類全体の利益のために海洋へと躍り出ているといつてよからう。

カムデンは、この至福の立地条件を地形の変化という文脈でみようとする。以上の引用文に続いて、彼は次のようにいう。

ケントとフランスのカレーとの間でイギリスが海に向かって突出し、英仏海峡がたいへん狭くなっていることから、ある時期まで排除されていた海水がそこに流れこんできた、と考えるひともいる。⁽¹⁴⁾

この国が大陸から切断されたとする説を補強するためにカムデンが持ち出すのが、古典古代の文献である。そのひとつは、ウェルギリウスの『田園詩』（『牧歌』）。

更に全世界から遠く隔絶されたブリタンニア人。⁽¹⁵⁾

カムデンは、ケントの章で再びこの問題を取り上げて、かなり詳しい分析をおこなう。まず、彼は次のようにいう。

この狭い海峡がガリアとブリテンを分けているこの場所に、かつては両者を結ぶ海峡があったが、その後、大洪水、あるいは高波の侵入、あるいは地震によって引き裂かれ、海水が入ってきた可能性、それは検討してみる価値がある。地球の表面が大洪水によって、また同時に、長年の歳月にわたり他の原因によって変化してきたこと、さらに、島が地震、あるいは海水の水位の低下によって大陸とつながったことは、だれも否定しまい。そして、島が地震や海水の侵入によって大陸から切り離されたことは、もっとも信頼に足る著述家を書いたものからも明らかである。

ここでもカムデンは、以下のような古典古代の作家の文章を引いてきて、自説を補強しようとする。まず、古代ローマの詩人、オウィディウスの『変身物語』。そこで描かれる、壮大でダイナミックな天地創造、そして天変地異の語りは、この時代の地形史の研究に、いわば詩的なインスピレーションをあたえた。そこからの引用文はつぎのとおり。なお、これはピタゴラスが語るという体裁になっている。

現にこの目で見たのだが、かつては固い地面であったところが海に変わっている。逆に、海が陸になった例も知っている。⁽¹⁶⁾

次に、ウェルギリウスの『アエネーイス』から。

この地域はその昔に激しい力が広大な崩落を起こして裂けた。それほど大きな変化を生む力が長い歳月の経過にはある、二つに割れた、と言ひ伝えられる。それまで両側の陸地は途切れなく一つであったが、その真ん中に海が激しい勢いで流れ込み、波がヘスベリア（イタリア本土）側をシキリア側から切り離した。田野と町々は岸に沿って引き裂かれ、狭い潮の波に洗われている。

さらに、セネカの『自然研究』。

見よ、地方全体が今まであった場所から裂き取られ、直ぐ隣にあったものが今や海の彼方に横たわっているのを。見よ、都市も種族も引き裂かれてあることを。自然の一部分が激動を受けて、或る他の所へ海や火や大気を押し付けるときに。これらのものの力は、全力を尽くして押し寄せるので、驚くべき威力がある。つまり、たとえそれが一部の所だけに荒れ狂うとしても、にもかかわらず世界の諸々の力を用いて荒れ狂うからである。たとえばヒスパニアをアフリカとの繋がりから裂き取ったのも海であるし、また最大の詩人たちが歌っているあの洪水によつて、シキリアはイタリアから押し流されている。

最後に、プリニウスの『博物誌』。

また自然がシチリアをイタリアから、キプロスをシリアから、

エウボエアをボネオティアから、アタランテスとマクリアスをエウボエアから。ベスピクスをビテュニアから、レウコシアをサイレン岬から引き裂いたときには、それは自然が島をつくつたいまひとつの方法である。

このように、ルネッサンスの知識人の一人としてカムデンは、古典時代の著述家からの引用によつて地形の可変性説が權威あるものであることを披瀝した後、実地検証に基づいて、次のように分析する。

では、土壌は両岸において同じであろうか。確かにその通りなのである。海峡がもっとも狭まったところでは、両岸とも高い岩がそそり立ち、岩質も色もほとんど同じであり、そのことは、両者が切り離されたことを物語っているに違いない。

では、この海峡の幅はどのくらいであろうか。この海峡は、ジブラルタルやシチリアよりはるかに広いというわけではない。すなわち二四マイルほどである。したがって、一見するだけで、激しい高波によつて両者が切り裂かれたと想像してしまう。地震によつて地盤が沈下したとはまったく考えられない。というのも、この北方の世界では地震はめつたに起きないし、起きても、けつて大きいものではないからだ。

では、英仏海峡の深さはどのくらいか。シチリア海峡は八〇ペース。こちらは二五尋をこえない。しかるに、両方の海はそれよりもはるかに深い。

では、海底はどうなっているのだろうか。砂状か、丘のようか、泥状か。また、このように狭い海峡に、砂州が点在しているのだろうか。船乗りから教えてもらったところによると、海峡の中央にひとつだけ浅瀬があって、水位が低いときには、深さはわずか三尋ほどである。⁽²⁰⁾

ちなみに、一七世紀後半のイギリス科学を代表するひとり、ロバート・フックは先にみたカタストロフィー・地震派のもっとも著名な人物だが、そのフックは、プラトンの描く「アトランティス」を海中に沈めたその同じ地震によって、「イングランドとアイルランドが海中から持ち上げられた」可能性を王立協会における連続講演のなかで示唆している。⁽²¹⁾

このように、カムデンは島国の地学的形成について地震の可能性を示唆しながらも、北方世界での地震現象の少なさを理由に、それを否定し、結論としては海水の浸食作用に落ち着く。

実際、カムデンはイギリスのここかしこで海岸線の変化に並々ならぬ関心を示していた。たとえば、同じケントについて、カムデンはRomneyの興亡を次のように書いている。

ドゥームズデー・ブックには次のように書かれている。「Romneyの住民は、海事奉仕ゆえに、強奪、秩序攪乱、買い占めに對する料金をのぞいて、いっさいの租税を免除されている。」その頃(ドゥームズデー・ブックは一〇八六年に作成される)がこの町の絶頂期であった。町は一二の街区に分かれ、五つの

教区教会、一つの小修道院、一つの病院があった。ところが、エドワード一世の治世下(一二八七年)、強風にあおられて海がここを襲い、住民や家畜や家屋に甚大な被害をもたらした。それまでこの地点で海に流れこんでいたRother川の水路が変わり、ここでは河口がふさがれ、Rheの近くで海に注ぐようになった。こうして、しだいに海はこの町を見捨て、町は爾來かつての住民の大半と、そして繁栄を失った。⁽²²⁾

この海岸線の変化によるRomneyの衰退については、イギリス古事物研究の父祖であるジョン・リーランド(一五〇三?—一五二)も注目するところであった。その『巡行』(生前は未完のノートの状態にあったが、カムデンをはじめその後の古事物研究者がよく参照することになる)にはつぎのように書かれている。

Romneyは、かつてはたいへん良い港であった。いま生きている人が記憶しているところでも、船がこの町までやって来て、錨をその教会の境内におろしていた。ところが、今では海は、この町よりも二マイルも離れている。それにとまなう衰退はひどいもので、かつては大きな教区教会が三つもあったのに、今では、どれひとつとして、満足な状態にないのである。⁽²³⁾

さらに、イギリス古事物研究の先駆的な作品であるウィリアム・ランバート(一五三六—一六〇一)の『ケント巡行』(一五七〇年)にも、ドゥームズデー・ブックのRomneyについての記載内容が

カムデンよりもっと詳しく書かれている。カムデンがこれを孫引きした可能性もある。そのランバートも、つぎのよう(24)にいう。「この町は、かつてたいへん広々とした良港だったこともある。」そして、高波による Rother 川の水路変更が、Romney の繁栄に終止符を打ったことは、現在の研究でも確認(25)されている。

カムデンの島国形成論は、このような海岸線の変化にかんする研究の延長線上にあるとみてよいだろう。今日からみても、海水の浸食作用に注目している点では、大地震もしくは大洪水に立脚するカタストロフィー派よりもむしろ穏当である。もちろん、そのような浸食作用が結実するのに要するはずの時間の単位は、カムデンをはじめ当時の大部分人にはまったく想像もつかないものだった。数千年単位の世俗史という切迫した時間感覚があったからだ。

こんどは、『ブリタニア』における、地震についての各論を拾ってみることにしよう。

① まず、ダラムの章から。

Darlington に属する野原に、三つの非常に深い井戸があり、地獄の釜と呼ばれている。その水が熱いからである。学識のある人は、地震によって地面が沈んだものだと考えているが、ありえないことではない。というのも、Tinnouth (14世紀ベネディクト派修道士) による年代記の一一七九年には、次のようなことが書かれているからである。その年のクリスマス、Durham 司教区、Darlington 郊外の Oxenhall で、地面が高くせ

り上がり、その日の夕刻まで一日中、ずっとその状態にあり、それからすさまじい音とともに沈下した。近隣の人びとが恐れおのくような音であった。地面が吸い込まれ、そうして深い穴ができ、今日までその証拠として残っている。(26)

② つぎに、ヘレフォードシャーの章には、次のようなくだりがある。

Lugg 川と Wye 川が合流する地点の東に、Marcley Hill と呼ばれる丘がある。一五五一年、突然、眠りから目覚めたように盛り上がり、まる三日間、その巨体を、恐ろしい大音響とともに前進させ、行く手にあるものすべてをなぎ倒し、さらにせり上がったのであった。自然科学者がいう、Brasmatia という種類の地震であろう。(27)

参考までに、イーヴリンの二六九六年二月二六日の日記には次のようなことが書かれている。

ドーセットシャーのポートランド近辺で地震があった。というよりも、突然、石切場の近くで長い距離にわたって地面が沈没した。そのため、セント・ポール大聖堂への石材の運搬ができなくなっている。(28)

このように、一口に「地震」といっても、今日、その言葉で理解

されるもの以外にも、地滑りや土地の陥没なども「地震」のなかに含まれていたのである。このことは、アリストテレスの地震論がこの時代においても、なお基本だったことを意味する。

①の「地震の釜」については、一八世紀の文豪、ダニエル・デフォーの有名な『イングランド・ウェールズ紀行』（一七二四—一七二七）に次のような観察記がある。

この地獄の釜は驚異としてよく語られるものであるが、私はそのような田舎者の話にはほとんど驚異などないことがわかってい
たから、そう簡単にだまされなかった。それは、「ees川の水
でいっぱいになった昔の石炭穴にすぎないことは、明らかであ
る。⁽²⁹⁾

デフォーは『ブリタニア』を彼の紀行文のここかしこで参照しているが、この部分についてもカムデンを意識していることは間違いない。この地震伝説の成り立ちそのものはわからないが、おそらくは珍しい自然の形状にまつわる、ローカルな伝説が、カムデン、さらに、だめ押しの（たとえ否定しても、有名になったことは間違いない）デフォーによって全国ネットワークのものに格上げされたことは確かであろう。

この二つは、自然現象の記録に属する。それに対して、以下の三つは、ある地域の没落にまつわる伝説のなかの地震である。

③ まず、ランカンシャーの *Ridchester* と呼ばれる村について。

ここでは、彫像、貨幣、柱、台座、迫元、祭壇、大理石、碑文など、古代ローマの形見が日常的に掘り出されるので、住民の、韻律が不完全な歌も、まったく根拠がないわけではないようだ。

Ridchester の名前はローマの壁にも書かれている。

そこは、キリスト教世界でいちばん豊かなところであると。

しかし、その栄華も戦争、もしくは、（一般に考えられているところでは）下手でおきた地震によって最後に破壊されたのであった。⁽³⁰⁾

④ 同じようなものとして、ヘレフォードシャーについて、つぎのような記述がみられる。

Harford（一般住民は *Hereford* のことをこう呼ぶ）は、その近くにあった *Ariconium*（ローマ人のステーション）からその名前も起源も由来すると思う。しかし、今日では町があったというはっきりしたしるしは見あたらぬ。伝えられるところによれば、地震によって破壊された。⁽³¹⁾

⑤ 最後に、ウェールズのブレコンシャー。

ブレコンの東方、二マイルのところ、おおきな湖がある。ウェールズ人は *Llyn Sawadhan*、とか *Lyn Savadhan* とか呼ぶ。

ギラドゥスは、その水が裂けるとときに雷鳴のような音がするの
で、Clamosumと呼んでいる。英語では、Becknockmereと
呼ばれる。この地方の住民の間で昔から語り継がれてきたとこ
ろによれば、いまは湖になっているところに、昔は都市があっ
た。ところがそれが地震によって呑みこまれ、それがやがて湖
になったのだという。その証拠として、彼らがいうには、ウェ
ールズの公道はすべてこの湖に向かっている。⁽³²⁾

ある地域の没落の説明として地震説が語られていることに注目し
よう。ここでは、地震は、ある地域がかつて栄華を誇ったものの、
いまはひどく零落してしまったことのメタファーになっている。以
上のことを確認したうえで、最後の⑤についてももう少し詳しくみて
みよう。

『ブリタニア』で問題になるのは、カムデンが実際に現地を訪れ
ているのかどうかである。ウェールズに赴いたことは確かだけれど、
イングランドほどくまなく歩いたわけではなさそうである。おまけ
に、ここでもそうだが一二世紀末頃に書かれたギラドゥス・カンブ
レンシスの有名な『ウェールズ紀行』をここかしこに引いてくるの
である。

そのギラドゥスは、この湖についてたいへん興味深いことを書い
ている。一二世紀ウェールズの反イングランド闘争の英雄、グリフ
ィーズ・アプ・リースにまつわる伝説である。

その前に、時代背景を概観しておかなければならない。「全ウェ
ールズの王」とも称せられ、ウェールズ史上例のない広域支配を確

立したグリフィーズ・アプ・ルウェリン（在位…一〇三九—一〇六三）の
死後、ウェールズは再び混乱に陥るが、一〇八〇年代、北部のグウ
ィネッズ王国は、グリフィーズ・アプ・カナン（在位…一〇七五—
一一三七）、南のデハイバース王国は、リース・アプ・テウドル
（在位…一〇七八—九三）のもとでそれぞれ安定した。一一二〇年、
イングランドでヘンリー一世が即位し、新しい対ウェールズ政策を
押し進めた。グウィネッズはグリフィーズ・アプ・カナンのもとで
むしろ勢力を拡大するものの、デハイバースではイングランド勢力
の浸透が進行し、リース・アプ・テウドルの息子、グリフィーズ・
アプ・リースは「ひとつのクウムドの領主」に零落してしまった。

一一三五年、ヘンリー一世が死去し、ステイーブンが即位すると、
一一三六—一三七年、グリフィーズ・アプ・カナンとその息子のオウ
ェン・グウィネッズ（在位…一一三七—七〇）による反英反乱が展
開した。グリフィーズ・アプ・リースは、かつてはグリフィーズ・
アプ・カナンによって裏切られたこともあったが、このときはその
娘と結婚しており、義父と同盟を結んでイングランドと戦い、カー
ディガン北方で決定的な勝利をおさめたのであった。グリフィー
ズ・アプ・リースの妻も「アマゾン」のようにして戦い、戦死した
と伝えられる。しかし、一一三七年、グリフィーズ・アプ・リース
は新しい夫人の裏切りによって殺害される。当時の年代記は、グリ
フィーズ・アプ・リースのことを「南ウェールズの人びとの光明で
あり、強さであり、優しさである」と書いている。なお、ギラドゥ
ス・カンブレシスの母方の祖母ネストは、リース・アプ・テウド
ルの娘であった。⁽³³⁾

さて、グリフィーズ・アプ・リースにまつわる伝説として、ギラドゥス・カンブレンシスが『ウェールズ紀行』に書いているのは、グリフィーズ・アプ・リースがヘンリー一世の治世下で小領主の身に甘んじていた時期のものである。簡単にまとめると、この湖に住む鳥たちは「この国の本当の君主が命じると、さえずる」という昔からの言い伝えがあった。グリフィーズ・アプ・リースが、ヘンリー一世の腹心に促されてそのように命令してみると、湖の鳥たちは、たしかに大きな声でさえずりはじめたのであった。それを聞き知ったヘンリー一世は次のようにいう。「われわれは権威をかさにして、ウェールズの人びとに暴虐無人のことをしてかしたが、彼らこそ、この国の本当の継承者であることがわかっているのだ。」⁽³⁴⁾

そのうえで、ギラドゥスは、この湖について次のように書いている。「住民の目撃談によると、建物や牧場、庭、樹木で覆われてみえることがあるという。」⁽³⁵⁾ また、一七世紀後半の高名な古事物研究家のジョン・オーブリー（一六二一—一六九七）の、生前は未完のままに終わった『ブリテンの遺跡』では、この湖のことがこう書かれている。「ボートから、あちらこちらに舗装された道を見てとることができる。それゆえ、昔、町があったことは明らかである。」⁽³⁶⁾

まず、今日の考古学の調査で、この湖には鉄器時代、湖上居住者が居住していたことが確認されており、その考古学的な遺跡が、この伝説の空間レベルでの核となったと考えられる。⁽³⁷⁾

そして、北部のグウィネッツ王国のグリフィーズ・アプ・カンナンとオウエン・グウィネッツ、南部のデハイバース王国のリトス・アプ・テウドルとグリフィーズ・アプ・リースという二組の親子につ

いては、「ハリウッド映画もどき」の英雄談がそれ以降、語られるようになった。⁽³⁸⁾ それと上記の考古学的な遺跡とが、地震というメタファーを介して結合し、このような伝説になったのではないだろうか。

ここでもっとも注目されるのは、カムデンが引用文からわかるように、この湖についてもギラドゥス・カンブレンシスの『ウェールズ紀行』をたしかに参照しているのに、また、他の地域ではこの種の話におおいに興味を示すのに、イングラッド側からみて好ましからざるこの伝承を完全に無視したことである。とりあえず、ここでは歴史家の「自主規制」ということとしておき、今後、同じような事例とつき合わせながら考えてみたい。

冒頭でも述べたように、この研究はまだ序の口の段階にある。ここでは、とりあえず地震論に絞って、結論めいたことを述べてみる。一六四三年七月、ピューリタン革命の進行に恐怖してフランスに亡命したジョン・イーヴリンは、フランス到着後の日記に次のように書いている。

Boullongn は、町が二重になっていて、その一部は切り立った絶壁のうえにある。この地方は丘陵地帯であり、ドゥヴァー周辺のダウンと似ている。昔、ある地震によって引き裂かれたと多くの人が考えている。⁽³⁹⁾

イーヴリンは、一六六〇年の王政復古の後は、チャールズ二世の



図③



図②

宮廷に出入りし、また王立協会の創設にも関与するなど華々しい生活をおくることになるが、この段階では、いつ祖国に戻れるのか、そもそも戻るのかどうかもわからない状況におかれていた⁴⁰。その文脈では、地震が彼自身の心象風景でもあったことは明らかである。

これを参考にしながら、『ブリタニア』の地震についてまとめてみよう。

カムデンが、中世カソリシズムにたいしてシンパシーをもっていたことは確かであり、そのためにプロテスタントの急進派からは白い目でみられることもあった。また、ルネッサンス型の文人としてのカムデンは、ヨーロッパの知識人のおお共通語としてあったラテン語を介する大陸との文化的な結びつきを大切にしていた。古代ローマ帝国への憧憬もその文脈でみなければならぬ。

しかし、カムデンは、事実の重みということを知る歴史家でもあった。宗教改革によるプロテスタント文化の誕生、そしてエリザベス朝時代における「国民」文化の発展。皮肉にもカムデン自身がそのような島国文化の発展に大きく貢献したわけだが、地震ないし海水の浸食による大陸からの切斷、そして島国の誕生を『ブリタニア』のなかになぞらえ書きこんだのは、もちろん自然誌的な関心もあったのであるが、深読みすれば、後ろ髪を引かれつつも大陸に対して決別を告げ、新しい国家と国土のあり方を模索しようとする自身と、そしてこの島国の住民に対して、この新たな門出のことを告げようとしたからではないだろうか。

最後に、国土と国民の誕生ということをも、本稿の内容に即してみれば、ローカルな伝説なり遺跡が『ブリタニア』という当時のベスト・セラー、さらに、半ば剽窃まがいのものも含む各種の類書を介して全国的なものへと昇華したことが注目される。

図②は『ブリタニア』に掲載されたストーン・ヘンジの図である。『ブリタニア』は英語の本としては初めて考古学関連の図版を載せ

たとされる。また、図③はアーサー王の十字架と称されるものである。これらもまた、『ブリタニア』を介して、なおいっそう広く知れ渡るようになる。

古代ブリテン人によって建造されたとされるストーン・ヘンジ、アーサー王の伝説、そしてスタッフォードシャーの三人の聖職者の殉教。一般の生活人が、なにかしらの機会に眼にするこれらの図版、あるいは伝説を介して、遠い時代の、しかも遠い地域のものである。自己の生活空間と文字どおり「陸続き」のものとして実感できようようになったとき、その生活人は「国民」となるのではないだろうか。カムデンの『ブリタニア』はその意味で、近代イギリス国民史の誕生を告げる書なのである。

※参考文献は最小限にとどめる。詳しくは、拙稿「ウィリアム・カムデン著『ブリタニア』を読む」、『紀要（中央大学文学部史学）』第四八号、二〇〇三年。

- (1) L. Daston and K. Park, *Wonders and the Order of Nature, 1150-1750, 2001.*
- (2) 一六二〇年版、八八、一一〇頁。一六九五年版「LXXXVIII」civ頁。
- (3) 一六二〇年版、五八七頁、一六九五年版、五三四頁。
- (4) F. J. Levy, "The Making of Camden's *Britannia*", *Bibliothèque de l'histoire et de la Renaissance*, 26, 1964, p. 91.
- (5) 一六二〇年版、五八二頁。一六九五年版、五三〇頁。
- (6) 南川高志、『海のかたのローマ帝国』岩波書店、二〇〇三年、二四一―五頁。なお、南川氏は、「キヤムデン」そして「ブリタニア」と表記

している。何人かの英文学者に問い合わせたところでは、「カムデン」そして「ブリタニア」でも差しつかえないとのことであった。

- (7) C. Davison, *A History of British Earthquakes, 1924*, pp. 9, 338-9, 383. ちなみに「ウィリアム・モリスの『エートピアだより』のなかたの地震のことを念頭においたに違いない文章がみられる。川端康男訳、晶文社、二〇〇三年、二四八頁。ついでに、同書には、一九世紀的な「古事物研究者」が登場する。二六四頁。

- (8) J. Slow, *The Abridgement of the English Chronicle, 1618* ed., pp. 331-2; T. Churchyard, *A Warning for the Wise, a Faerie to the Fond, a Bridle to the Lewde, and a Glasse to the Good, 1580*, p. 5; R. E. Ockenden, ed., *Thomas Tusser's Discourse on the Earthquake of 1580, 1936*, p. 5.

- (9) J. Evelyn, *The Diary of John Evelyn*, ed. by E. S. de Beer, 1955, vol. 5, pp. 115-6.

- (10) M. Paris, *English History: from the Year 1235 to 1273, 1852-4* ed., vol. 2, pp. 210-1.

- (11) 『ロンズン……』一八、二四〇頁。

- (12) 同上書、一三七頁、二四六―八頁。

- (13) 以上 G. L. Davies, *The Earth in Decay, 1969*, chap. 1, 2.

- (14) 一六二〇年版、一頁。一六九五年版、止頁。

- (15) ウェルギリウス『田園詩』越智文雄訳、生活社、一九四七年、七頁。なお、河津千代訳では「また、地の果ての遙かなブリタニア人のもとへ」となっている。『牧歌』未来社、一九九四年、六四頁。

- (16) オウイティウス『変身物語』中村善也訳、岩波文庫、一九八四年、下、三二二頁。

- (17) ウェルギリウス『アエネ이스』岡道男、高橋宏幸、京都大学学術出版会、二〇〇一年、二二四頁。

- (18) セネカ、『自然研究』茂手木元蔵訳、東海大学出版会、一九九三年、

一六一頁。

(20) プリニウス『博物誌』中野定雄、中野里業、中野美代訳、雄山閣、一九八六年、第一巻一二三頁。なお、近世ヨーロッパに於けるプリニウスの採用については、C. G. Nauert, "Humanists, Scientists, and Pliny", *American Historical Review*, 85, 1979.

(21) 一六二〇年版、三四六七頁。一六九五年版、二〇六一頁。

(22) R. Hooke, *The Posthumous Works of Robert Hooke*, 1705, p. 320.

See also, T. Burnet, *Sacred Theory of the Earth*, 1665 ed., p. 108.

(23) 一六二〇年版、三五〇頁。一六九五年版、二二二頁。

(24) J. Leland, *John Leland's Itinerary*, ed. by J. Chandler, 1998, p. 258

(25) W. Lambert, *A Perambulation of Kent*, 1826 ed., p. 178.

(26) B. W. Cunliffe, "The Evolution of Romney Marsh", in F. H. Thompson, ed., *Archaeology and Coastal Change*, 1980, pp. 48-51.

(27) 一六二〇年版、七三七頁。一六九五年版、七七四頁。

(28) 一六二〇年版、六二〇頁。一六九五年版、五七八頁。

(29) J. Evelyn, op. cit. vol. 5, p. 230.

(30) D. Defoe, *A Tour through England and Wales*, 1927 ed., vol. 2, p. 248.

(31) 一六二〇年版、七五〇、七五二頁。一六九五年版、七九二頁。リレーランドは、別の伝説「すなわち、「エタヤ人の寺院」がかつてあり、たとすゝ住民の「おもしろ話」を記録しようとする。J. Leland, op. cit., p. 271.

(32) 一六二〇年版、六二〇頁。一六九五年版、五七五頁。

(33) 一六二〇年版、六二八頁。一六九五年版、五九〇頁。

(34) 青山吉信編『世界歴史大系・イギリス史・1』山川出版社、一九九〇年、一四二、二九九―三〇五頁。おもしろ、*Dictionary of National Biography* の関係箇所。

(35) Giraldus Cambrensis, *The Itinerary through Wales and Description of Wales*, 1908 ed., pp. 30-2.

(36) Ibid., p. 33.

(37) *John Aubrey's Monumenta Britannica*, ed. by J. Fowles and R. Legg, 1980, p. 482

(38) J. Westwood, *Albion*, 1985, pp. 282-4.

(39) Gwyn A. Williams, *When was Wales?*, 1985, p. 65.

(40) J. Evelyn, op. cit., vol. 1, p. 57.

(41) 『ロンドン…』三二―四一頁。